明治三十一年十二月二十六日郵信省第三種郵便物認可
明治三十四年三月一日發兌
毎月(二回一日、十五日)發行

教時報

第五十號

社說
◉規律なき國民◉遊廓傳道……文學士 紀平正美
論說
◉倫理の實踐は社會觀念を明にするより外なし……鹽谷良吉
◉地方父兄に望む……
社會
◉佛教徒懇話會◉坊守教會◉實行の時代◉宗教制度の調査
雜錄
◉西教事情……(在伯林)文學士 近角常觀
◉先德餘香……文學士 本多辰次郎
信眞
◉忍辱の心……文學士 清澤滿之
◉動機を一轉せしめよ(修養の一方法)……楠龍遵

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政教時報第四十九號目次

社說　偉人逝く◎公德實行會◎病院の設備
論說　政治界に於ける佛教の感化勢力（有馬文學士）◎監獄所見（楠龍造）
社會　一種の社會的制裁◎禁酒法案等
雜錄　紐育通信（秦文學士）◎冷言熱語（中山文學士）
信眞　友に與へて不滅の信仰を論ずるの書（其二）（眞岡文學士）

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部
明治三十四年二月二十八日印刷　明治三十四年三月一日發行
發行兼編輯人　上村幸太郎　印刷人　上村幸太郎

政教時報

規律なき國民

規律は文明國民には最必要なり、規律なき社會は開明社會と稱すべからざるなり、開明、半開、未開、野蠻を社會狀態の四階級とすれば、規律は次第の如くに乏しくなり行くは、爭はれぬ事實なり、一個人の身の上に取りても、衣服、飲食、起臥、動靜規律なき人は健康を損ひ易し、百年の長壽を保たんと欲し、身心健全の幸福を得んと希はゞ、生理の命ずる規律を守りて衛生に注意せざるべからず、一家にして規律なく亂雜なるときは、父子長幼夫妻主從等の間に、不和も起るべく、混雜も生ずべく、其家庭は整はずして其家は繁盛を期すべからざるなり、之を國家に及ぼし、之を社會に推論するも其理一にして變ずることなきや明かり、然れば則規律の守らるゝと守られざるとは、やがて其社會の文野の分るゝ岐路なりといふも、强ち失當の言にはあらざるなり、

夏來りて暑く、冬至りて寒きは是天に規律あるなり、春雨灌ぎて櫻花爛漫の美を裝ひ、秋風扇いて禾穀稔るは是地に規律あるなり、兩間に位する人にして何んぞ規律なくして可ならんや、野蠻未開人士の間にも亦多少の規律の行はるゝは、以て人に規律無かるべからざるを證するものにあらずや、而も彼等の社會は其狀態簡單なるを以て、左程規律に注意せずとも差障を生ぜざるなり、見よ彼等の社會の間には定れる夫婦といふ者さへ無くして、歲月を經過し得るなりと開明人種に對して一日此制裁規律を撤去すべしとせんか、如何なる不都合を生ずるか、殆ど豫想外にあるべし、世は開明に趣くに從ひその社會狀態複雜に赴く、規律の益嚴守せられざるべからざるや論なきのみ、

規律を守らざるが爲に、個人若くは社會に損害を及ぼすことは實に數へ盡されざる程多大なり、近時喧しく世上に論議せらるゝ公德問題の如きも、其條目を枚擧し來れば概ね皆規律を確守せざるより來らざるはなし、斯くの如く我國人が規律を守る能はざるは何の爲ぞ、余輩は遺憾ながら邦人從來は簡單なる未開世界に棲息せし習慣に制せられて、俄然長足の進歩を爲したる、複雜なる、繁忙なる、多事なる開明社會に住み慣れざるが爲に、些細なる規律をも守るに懶きなり、其狀恰も猿猴が衣冠を着くるを好まざるに類するものありと答へざるを得ざるなり、約束の期日を確守せざるが如きも、規律を守る習慣なき故、之を格別の不德なりとも感せず、又自己に不利なりとも考へざるに由る、知らずや邦人は曾て此惡習慣の爲に外交上にも大失敗をなし國家に大なる恥辱と損耗とを蒙りしとを、文久元年歐洲に遣されし竹内松平の兩使は露京に於て彼國の外務大臣と談判を遂げ、日露兩國互に使節を出して、樺太島境界の談判を開設せしめんと致して歸りしも、我國は其委員を契約期日に出さずして、露國委員を空しく黑龍江畔ニコライスクに待ちボケせしめしを以て、後年

談判の時我は辞柄を失ひ、遂に樺太全島を擧てザーの膝下に献ずるに至れり、是猶吾人の耳目に新なる事實にして終天の恨事とする所にあらずや、違約の自己に取て不利益なるは此一事以て明知すべきなり、而して是職として不規律無節制を罪惡と心得ざるより來る、余輩は敢て萬事萬物規則に拘泥して、不自由なる窮屈なる世の中たらしめんと欲する者にあらざれども、規律を守るは他より強ひらるゝにあらずして、自己の自由意志を以て守るに在れば、自由も樂地も規律嚴守の中に存し得るを信ずるものなり、故に余輩は斷言せんとす、規律を守るを厭忌する者は文明國民たる資格なきものなりと、我同胞諸君は此點に向て猛省一番せん事を希望するや切なり、

遊廓傳道

樓主、娼妓、妓夫、仲居等總べて醜業を營むの徒は、之を非かと問はゞ何人も其奇問に驚くべく、或は時によりあまり不人情の事なぞを爲せる時は、其人を賤み罵り、指斥して人非人と呼ぶことあれども、眞面目になりて人か非かと問ふは實に奇なり怪なりといふ人のみならん、然り余輩も彼等は確に人類なる事を疑はざるなり、否我大日本帝國の臣民にして、天皇陛下の赤子たり、余輩の同胞兄弟たるを確信するものなり、故を以て彼等は帝國憲法の保障により、法律の認許に隨て、自由に營業を爲し居るなり、又廢業を爲し得るなり、斯くの如く法律に明かに、彼等を自由人と認むるに、宗教は惟り何が故に彼等を人として待遇せざるか、否宗教は固より一視同仁なり、況して佛教の如きは、其高尚なる教理より言ふ時は、草木國土さへ成佛すべしと談ずるにあらずや、假令他の宗教といへども、墮落せる人類を救濟すべしとこそ教ふれ、墮落せるものは措いて顧みる勿れとといふ、教は決して聞かざるなり、然るに今の宗教家は何が故に彼等を捨てゝ顧みざるや、一部の宗教家は彼等の救濟を、廢業せしむるより外に無きが如く思へり、余輩は公娼廢止に贊成するや、曾て說述せしが如し、今日直に彼等醜業者を悉く廢業せしめ得べくんば、今方に醜業を營み居る輩を顧みるなくして可ならんも、如何に大聲疾呼して、廢娼論を主張するも實際之を根絶せしむるは近き將來には先づ以て難事たるを知らば、現に遊廓に於て營業しつゝある者に向て救濟の方法を講せざるべからざるや明なり、救濟とは決して廢業せしむるのみには限らざるなり、是に於てか余輩は盛に遊廓傳道を唱道せざるべからず、彼等は種々の事情により、現下身には醜業を營めども、精神は純良高潔ならしめん事を力めざるべからず、身は墮落せるも心は救濟せざるべからず、是佛陀矜愛の慈悲なり、斯る憐なる位置に沈める人類の救濟を願みざる如くんば、三界の大導師たる天職を盡すものにあらざるなり、今や種々の新傳道起りて、工女といひ、罪囚といひ、等しく皆佛陀の慈光を蒙むらしめんとするに、何んすれぞ彼遊廓内に苦しめる同胞をのみ疎外するか、思へ彼等は廓外に在る寺院にも教會堂にも、容易に說教をも演說をも聞かんと欲するも其自由を

得ざる身なり、去れば茲に新組織の傳道法を設けて彼等に法雨を灌ぐにあらずんば、遂に彼等憐むべき同胞は救濟せらるゝの期なかるべし、娼婦なりとて賤むなかれ、彼等も遂には人の妻たり母たるべきものにして、社會に立つべきものなり、且人を賤み之を顧みざる如きは、徹頭徹尾宗教者の爲すべき所爲にあらざるなり、余輩は是に於てか繰り返して言はん今の佛教家は滿胸の同情を以て、遊廓傳道を組織して、彼憐なる同胞の救濟に從事せよと、

＊　＊　＊

塵塚に菜の花見ゆる彌生かな

論說

倫理の實踐は社會觀念を明にするより外あし

紀平正美

近頃公德問題の隨分八ヶ間敷くなつて來たのは、誠に喜ばしき次第であります、世間の人が誰しも申す通り、今日我邦の有樣は過度の時代と申して、昔からの風俗習慣は西洋思想の爲めに打破られ、新らしき風俗習慣が未だ確定しないので、此の如き時代に其風俗習慣が墮落するのは何れにもあるとで別に不思議でもないのです。と申して蒔ぬ種の萠えぬと同し道理で、今の中によく研究して善い種を蒔て置かねば、次に出來上つた風俗習慣が、今の時代のものより一層下劣なものとなり下るのでありましよう、よく東洋の宗教家などにはある例でありますが、自分一人の行さへ高くして置けば、世はなるやうにこそ成らぬと、捨て置て、人々の日々墮落するのを傍觀するが如きは、志士仁人の爲すべきことではありませぬ

苟も志あるものは必ず今の時に善き種を蒔かねばならないのです。釋迦、孔子、耶蘇「ソクラテス」等の大人物は、皆斯樣な時代に尤もよき種を蒔た人なので、鬼でも神でもない矢張其時代の志士仁人なのであります。何卒して今日の人々が皆此の如き志士仁人でありたいものであります。それで、茲に少し私の考を述べて見たいと思ふのは、此志士仁人のなすべき中で、何が今日尤も大切であるかといふ事であります。それには色々雜多に多くありましようけれども私の考ふる所では社會觀念を明にする、換言すれば社會といふ人の集りは、如何なる集であるか、我等は其社會で如何なる關係にあるかといふ思想を明了するのが、尤も必要で、今日の急務であると思ふのです。勿論今始まつた議論でない、誰れしも云ふ事なので、私一人の意見でないのでありますが、其が又何故か大切であるかと云ふことになると、隨分六ヶ敷い事で、眞の志士仁人とならうと思へば、又此の理由が確かでなくてはならないと思ひます。そこで私は倫理道德が如何なる者であるかといふ研究からして、其事の非常に大切である事の理由を少しく述べて見たいと思ふのであります。併し是も終局の處は是非哲學の力を借らねば、解釋の出來ぬとでありますし、倫理

學上の議論も入りますから、六ヶ敷き所はドシ〳〵拔にして極く平易に述べる積りであります。

廣い宇宙の間に行はれて居る法則に二ツあります、即ち自然法と行爲法とであつて、自然法の事を獨乙語で「ミュセン」と申します。是は「……せねばならぬ」といふ事でありまして、石を拾ひ上けて其の手を離せば墜ちねばならぬ、即ち重力の法則、火を握めば熱くあらねばならぬ人爲で何とするとも出來ぬ、即ち熱の傳達といふ法則、斯の如くにねばならぬ法則、人爲で如何ともするとの出來ぬ、法則で自然は支配されて居るのです。行爲法とは獨乙語では「ゾルレン」と申しまして、「……すべし」といふ事であります、人は斯樣〳〵の事は爲すべし、或は爲すべからずといふ事で、此の法則があるので人は何事でも爲し得るのであります、「汝は此を爲し能ふは汝が爲すべきとなれば」とは、有名な「シルレル」の詩句であります、例へて申せば君に忠を盡し親には孝を盡すべき者なりとの行爲法があるので、君に忠、親に孝を盡すといふ行爲が出るのであります、ならぬといふ事より輕いといふ理ではありませぬが、實行するとせぬとは其の人によるので、此を行爲法或は倫理法といふのであります、

然らば何故に此の如く宇宙の法則が「ミュセン」と「ゾルレン」との二になるかと申しますと、此の答は明であります。人は精神の働きがある、尙正當な語で云へば、人には意識の働きがあるからであります。自然のものと人間との差の大切な點も是でありまして、自然のものは皆知らずに法則に從ふて居る、人間は知て其法則に從ふて居る、人は何事をするにも思ふにも皆其の事を知てをる、意識して居るので、知てをるから行ふても行はないでも勝手なりといふ「ゾルレン」の法則が出て來るのであります、例へば火を握めば熱ひから手を引くといふは自然的の動物の所爲でありますが、熱くてもかまはぬといふ人は是れを握て居るとも出來ます、それで意識する人間には火に觸れば手を引くべしといふ行爲法が出來るのであります。倫理道德の起る所、即ち行爲の價値の生ずるのも此の點なのであります。其れで知らずになす事は先づ倫理上の善惡の評價はないのであります。法律に過失罪のあるのは是れは又次にも述べましようが、倫理上から過失の罪のないもいであります。故に法律でも過失罪は故意のものより罪が輕くしてあるのであります。

又よし、知て爲すことでも、倫理上の規定以外にあるかの如きものがあります。其れは人間といふものを自分の一部として考へて見れは明であります。人間を構成するものは精神と身體とであつて、此の兩者は不離の關係に立ち、身體がなくなれば精神もなくなる、精神が支配することの出來ぬ身體は腐敗してしまいます。然るに此の人間の身體は勿論の事、精神でも或る意味から云へば自然物で「ミュセン」の法則を逃るゝことは出來ぬものであります。食はず飲まずに居たら死にます。使用せずに置けは退化します、高い處へ上れは落ちぬ樣の注意が入ります。精神が快の方面に向ふ。論理の法則に反しては思考することが出來ぬ。これ等は皆「ミュセン」の側

でありまして、何故に飯を食するか水を呑むか知て居て此を行ふても、善とも惡とも名づけべきものでない。同じく吾人の行爲ではありますが、自然物と同樣な點で、倫理法の規定以外にあります樣でありますけれども、込み入つて來ますが、是も中々善惡の評價を免れないのであります、之れは漸次辯ずる所でありますけれども、此れ丈で見ますると、未だ倫理と云ふも者ないのであります、倫理道德といふ所になると尙も意機的の行爲ならば皆評價がつくのであります換言すれは意識中の「ミュセン」に屬するものでも「ゾルレン」に屬するとでも皆倫理的意味を有するのであります。

今申す通り自分の身體を自然物の一として考ふ時は、自然法に從ふて行ふ行爲は倫理的意味がない筈なのです。何故ならば、せねばならぬ事をするので、素質がないのです。後悔するといふ事も亦、あーすれば善かりしを、斯くなせるが故に此の結果ありと悔、むので、一條の道よりなかり去ならば、即ち其の道より外に歩むことが出來なかつた場合には、後悔といふ事もない道理なのです。うれで、今迄大抵な學者は、此の點を倫理の起りとしますけれども、是では十分でありません。後悔や素質といふ事と、善惡とは意味が違ふ。譬ひ知て行ふた場合でも、自分一個で考へた時には、未だ善惡といふ觀念にはならないので。知て行へば、尙更正當な結果と考へねばなりません。其が社會といふ所に關係して始めて善惡となるのであります。例へて申すから。空腹である、食事をする、別に差支はないのでありますけれども。若し一家族が共に空腹な場合には、己れ一人食事して滿腹するが如きは、自己的で善とは云へませぬ。高き所へ上て、注意せずに居て、落て死ぬる、當然なると云ふては居られませぬ。己れ一人は自分で承知さへして居れば、死でも差支ありませぬが、己れの家族朋友、大にしては國家、人類といふ所、即社會の上から見ますれば、己れ一個の死は、中々重大な事であります、善の一ツとなります。其れで若し己れ一個のみ世の中に生存し得らるゝものとせば、己れの意識の活動通りにして居て、差支ない。自然の法則に從ふので、所謂「ミュセン」で、倫理的善惡はないのであります。倫理道德の起りを社會といふ所にありとせば、次に社會とは如何なるもので、其れからどうして道德の觀念が起るかを述べねばなりません。

（未完）

地方父兄に望む

鹽谷良吉

維新以來我國の進歩は、眞に驚く可きものあり、取分け教育普及の一點に至りては、唯々驚嘆の外ある可らず、浦々の漁村より山間の僻邑に至るまで到る處に咿唔の聲を聞くは、眞に喜ばしき現象にして、斯くてこそ眞の文明國たるに恥ずと云ふ可し、日進月歩の今日に於て、西洋諸國と同一の步調を取らんと欲せば、教育の必要益々切なるものあり、我輩に於ても、或西洋の學者の云へる如く、鍛冶職人の如きものにも、大學教育を受けし國には、至極賛成せる所なれども、子

弟を教育するに當りて大に注意せざる可らざるは、其人物の能力を知ると是れなり、其子弟を出來る丈け立派なる人物に仕上げ度は父兄の情として至極尤もの次第なれども、其人物の能力如何を顧みず、無暗矢鱈に教育を施すときは、其害却て教育せざるに優る者あるなり、近來學生の墮落甚だしく、淫風靈行日に盛にして、心ある者をして痛歎に堪ゆざらしむるは、想ふに其原因種々あるべしと雖、父兄が其子弟の能力に頓着なく、東京に出しさへすれば立派なる人物になるものゝ如くに考へ、委細構わずドシ〳〵遊學せしめ、所謂學生濫發の弊に陷ゐり、加之人を責むるに難きを以てし、隣りの太郎さんが學士になりたる故貴樣も學士になるべし、某誰は高等商業學校を卒業して、某商店の支配人となりたれば、貴樣も其通りになるべしなど、其子弟の得意不得意、時代、事情の相違等には一向頓着せずして、只管自己の理想的人物を作らんとするも、確かに學生の墮落腐敗を生じたる一原因なりと信ずるなり。

凡そ人には必らず得手不得手のあるものなれば、父兄たるものは先づ其子弟の得手不得手を見定め、然る後ちに學問せしむると頗る肝要なり、上戸には酒を薦め、下戸に餅を薦むるは接客の本旨なり、若し上戸に餅を強ひて、下戸には酒を強ひなば、啻に客を遇せる道を得たるものにあらざるのみならず、胃を損じ健康を害し、却て其人に少なからざる迷惑を蒙むらしむべし、子弟が父兄の恩澤により、高等教育を授けらるゝは、殆んど謝するに辞なき所なれども、上戸が餅を強ひられ、下戸が酒を強らるゝ底の注文を蒙りては、實に迷惑至極の事と云はざる可らず、父兄の強制默止し難く、厭や〳〵ながらに從事する學問は、聊かの進境ある筈なく、却て種々の誘惑に陷ゐり易く、一生の方向を誤るに至るものなり、現に我輩の知れる人にも、斯くの如き境遇のもの頗る多し、或人は其性美術を好み、就中繪畫に妙を得、自分は天晴名工となりたき志望盛なれども、父兄は之を許さず、若し其の命に戻り、畫師となるが如き場合には、斷然學費を給せざるのみならず、肉線をも切るべしと申渡され、泣く〳〵其好まざる學問をなし居るなり、而して其成績如何と云ふに、無論不結果にして見るべき者なく、聞けば近來は自棄になりて不品行なりとの事なり、又或中學生の如きは、生來數學は不得意にして、何時も其れが爲めに頭を痛め全力を之に傾注するも尚ほ人並の成績を得ず、友人などは之を氣の毒に思ひて、早く自分の得意な、科目を撰み、專問の學科に移る方可然と忠告するも、父兄は飽迄も高等學校より大學に入るべしと主張し本人は之を拒むの勇氣なく、余所の見る眼も氣の毒なる苦しみを續け居れり、人間の精根には限りあるものなれば、斯かる不得意の事に苦しめらるゝ人の行末こそ氣づかわしきの到なれ、

俗の諺に人を見て法を說けと云ふ事あり、教育も亦人によりて之を異にせざる可らず、千百萬の人間を、悉く同一模型の中に入るゝと、或は望ましき事あらんも到底行ひ難き所なり、されば世の父兄たるものは、善く其子弟の能力を見定め、決して無理なる注文をなさず、其人の特質によりて教育を施すの心掛け頗る肝要なり、若し亦其子弟にして、到底成功の見込なきものならんには、初めより斷然遊學せしめず早く農業なり商業なり、或は工業なりに從事せしむる方、本人に取りて幸福なるは勿論、社會全體の上より之を考ふるも、人物の經濟上頗る利益あるが故に、地方の父兄が此邊の注意あらんと、我輩の切望に堪ゆざる所なり

社會

佛教徒懇話會

豫報の如く去月十七日京濱佛教徒懇話會を上野精養軒に於て開かる、會するもの五十六名、もとより多數といふべからずと雖も、發起者の豫定數より多きこと幷に教界知名の士多く參會せられしとにより如何に盛會なりしかを知るに足るべし

幹事一同に向ひ着席を促し纏て席定まるや來會者の姓名を一々紹介せり、次て境野君開會の趣旨を簡單に述べ終りて、大内青巒居士來賓總代として一場の演說をなしぬ、要は自己が新舊佛徒の間に立て調和すべき年齡と云ひ經歷といひ適當の位置にあると喋々と例の如く雄辨をふるはれ當日第一等の出來なりき、ろれより饗應に移り食半にして、佛骨奉迎の一行中最も名高き可睡齋の日置默仙禪師は佛骨談を初めしより、島地默雷老師之に和し、必ず東京の地に安置せざるべからずとて、感慨の詩を朗誦せられ、遂に此問題は織田得能師の談話によりて終結を告げぬ、元老の氣焰中々當るべからざるものあり

更に眼科院の井上豐太郎氏は、獨乙留學中彼國民の宗教心に富むに反して、我等のいたく無宗教者たるとの耻かしきを述べ醫學博士片山國嘉氏は、斯道專門家の藏經の和譯に着手せられんとを望み、以下高津栢樹翁、脇田堯惇師、田中舍身居士續々起て快辨をふるはれ、いつ果つべしとも覺ゑねば、此時梅原蕉山君は、來賓一同に遠來の勞を謝し閉會を告げしは正に五時半、當日重なる出席者は島田蕃根、島地默雷、日置默仙、大内青巒、片山國嘉の諸氏、尙村上專精師は後れて參會せられたるは殊に遺憾なりし、

佛教主義記者の所屬雜誌を擧くれば左の如し

佛教、類佛教、佛教新聞、佛教每週新聞、通俗佛教、三寶、三寶叢誌、政教時報、精神界、勝友叢誌、淨土教報、加持世界、禪、日宗新報、教世の光、和融誌、宗報、寶鐘、日月、太陽、傳道、婦人雜誌、東北教會々報、法話、明教新誌

當日議決せしは、本年十一月を以て佛教徒懇話會を開くことにして、五名の幹事を選定し思ひ〳〵に散會せり近來愉快なる會合にして實に懇話會の名に耻ちずといふべし、

* * *

坊守教會

寺院は所謂布教の會堂にして、佛像安置を以て獨り滿足すべきにあらず、殊に信徒間に密接の關係を保つ上に於て欠くべからざるは寺院なりとす、寺院に對する住職の責任は云ふ迄

もなき事なるが、眞宗寺院にありては坊守たる夫人の責任は決して輕からざるなり、商家の繁昌は忠實なる番頭の力によるか如し、寺院の勢力を維持するに與りて力あるは、實に坊守の功と云はざるべからず、近來寺院の衰退する原因種々あるべしと雖も、眞宗寺院の夫人がよく其職務を盡すや否やに疑を存せざるべからず、

去月十四日東京淺草別院に於て、府下末寺の家族を集め、名けて坊守教會と稱し、新法主これに臨ませられ一場の御親諭を下し玉ひ、續て村上博士複演をなしぬ、其要旨は第一、坊守の職分を盡す事、第二、眞宗の何物たるを心得おくこと、第三、住職に對する心得、第四、檀家に對する心得、第五、子弟の教育等に分ちて懇切に教諭せられたり、なほ毎月一回つゝ例會を開くよし、洵に有益なる教會にして、此種の教會が各地に續々發生せられんことを望む

實行の時代

東亞佛教會が其目的の第一着手として市内托鉢をなすや、府下の各新聞競ふて俗氣紛々たる東都の地爲めに玄ばし清淨に化せられたることの賛辞を列ぬる所以のもの、通常の乞食僧にあらずして、名も高き目白の雲照律師、天台の慈薫僧正及南隧禪師其他諸大德の高僧によりて行乞されたればなり、今や教界の新氣運か此等老高僧の手によりて實行の幕はひらかれたり、所謂舊佛教なるものが活動の途に上れるものなり少くとも東亞佛教會は各宗の合同を計るに於て非常の便利を與ふるもの、東亞佛教界にして其宣言の如くよく實行するを得ば、希くは前途大に見るべきものあらむ、聞く、大日本佛教青年會にても會堂建築の機運既に熟し、遠からず世上に發表すべしと云ふ、要するに廿世紀の宗教は實行の時代にして、今後社會問題、慈善事業の如き諸種の問題が續々實行の方面に向い教界の新氣運を形成すべきは蓋し言を待たざるべきか、茲に至りて教界の前途益々多望なりと云ふべし、

宗教制度の調査

宗教制度調査は一面政府に向ひては客年十二月三十二宗派管長より宗教法案の議會提出延期のことを申請し又た一面には外國の宗教制度の調査に着手しつゝありて宗教制度調査所は東京と西京とに置き、九名の委員中東京には目下弘津說三、山村豐亮、有馬憲文、日野注雷、伊藤貫宗の五名にて内外の調査を爲し、京都にては薗光輸、和田圓什、靈拜諦全、前田誠節等居りて宗制調査事項の中專ら英國の分を擔當し居るといふ、因にいふ本會の近角文學士は獨乙伯林に滯在し目下宗教制度取調中にして、研究の結果追々本誌上にあらはるべし、本號雜錄欄に收めたる「西教事情」は其緒論にして滔々數千言一讀直に其梗概を知るに足る、以下逐號掲載すべければ讀者諸君の究研の資料となるは吾人の確信する所なり

智者能改過遷善。而愚者多護飾過非。遷善其德日新是稱二君子一。飾過則其惡彌著。小人。

雜錄

西教事情（緒言）

在伯林　近角常觀

我が畏敬親愛する師友、辱知、同愛諸君貴下。

諸君の温かなる同情を荷ひ、滿身感謝の念に堪へずして最愛の母國を辞してより、既に十月、烏兎匆々として年序亦云に更まる、而して一別已來萬里渺茫として久しく音信を絶す、洵に謝するに言なし、是一は南船北馬旅情匆忙たりしによると雖又他に大に其故なくむばあらず、抑、予が日本を辞するの時約すらく必す時々通信を發し、到る處其視察の結果を報道すべしと而して當時心私かに期するに身萬里の外にあるも通信頻繁にして殆と膝を交へて諸君と語るが如くせむことを以てせり、乃ち太平洋上船中に於て同僚池山榮吉君と相謀り第一回通信を草し、上陸後將に之を郵函に投ぜむとせり、而して翻て兩人倩々考ふるに此の如きは所謂皮相の觀察なる者たるへ積て千萬篇となすも何の効かあらむと乃ち斷乎として之を焚き爾來鋭意專心、犀利なる觀察をなし、西教の眞相を洞察する事に勉めたり、視察漸く熟するに及び愈に大に感心したりしものにして左程感心を價せざるものあり、前に注意せざりし事にして頗る注意を要する事あり、見聞益々廣くして片言の斷すべからざるを知り、洞察漸く深くして其淵源する所遠きを知る、當初は左程の意味あきものに興味を有し、四圍の境遇の異るを顧みずして漫に風俗制度を褒貶し、中頃に至りて初めて精密なる調査に着手せんとするや遂に茫として其津涯を知らず恰も牛を曠野に放つの感あり、特に宗教事情は先づ何の處に向て手を下すべきやに苦しむ、教會を訪ふ、音樂起り、牧師說き、信者拜す、政府者を訪ふ、法令知る可く、統計徵すべし、諸種の營造物を訪ふ、建築高壯なり、設備完美せり、而して未だ手は知らむと欲する所に達せざるなり、或は名士學者を訪ひ、或は新聞雜誌を蒐集し、新古の出版物を涉獵し髣髴として僅かに其大勢を方物することを得べし、而して一旦其端緒を得るや却て材料の豐富なるが爲め散漫として收束する所なきに苦しむ時に事實の撞着せるあり全く意見の衝突せるあり、況んや米英佛獨澳匈到る處全く國家の組織社會の情況を異にせること殆むと豫想の外に出で又單に耶蘇教と云へは人は直ちに新舊二派を想起するも「ゼシュホット」「カピタン」等の「オルデン」より「スヰーテンボルク」「クエーカー」の集會所に至るまで大に其趣を異にするものあるに於てをや、而して一首都に止りて漸く其端緒を得、其地に熟するに及び忽にして去て他の未知の地に轉ず、實に短日月にして到る處社會内部の宗教事情を探らむとす、困難是より甚しきはなし、嗚呼回顧すれば日本出立已來精神暫くも休まず、常に心を驅りて歳月と先を爭はしむ、異域の風物時に耳目を慰むるものなきにあらざるも遂に予等の心を牽くに足るものなし、各國到る處終日營々宗教組織の實況を視察し、其社會的

勢力を有するの偶然ならざるを察し、滿腔の感慨を抱きて歸り、旅窓燈下遙かに日本宗教界の將來を懷ひ、筆を驅りて所感を寫さむとせしこと幾回なるかを知らず、然れども猶考察の未熟を慮りて僅かに二三の短信を知人に致して聊か其所在を報することに止めたり、而して故國の知人纏れる通信を促す頗る切なるものあり、之を接する毎に未だ嘗て胸を刺し心を貫くの感なくむばあらず、是今日に至る迄の實情を白狀する者、蓋くは諸君幸に怠慢の罪を恕するあらば最幸とする所也。

夫れ泰西宗教の事情なるもの、其關聯する處頗る廣濶なり、各教派の信仰狀態、內部の組織、傳道の施設、經濟の運用、國家上の關係、政治上の位置、慈善事業の施設、教育上の成績、社會問題に對する態度、學術界に於ける趨勢等殆んど社會百般の事、宗教に關せざるなく、社會的圖書を繙くに當りて、必すや宗教上の關係に付て云々せざるは稀なり恐くば十年之が視察を委ぬるも猶足れりと爲すに足らざるべし、況んや僅々十ヶ月の短日月に於てをや、然れども此間に於ては予輩が出來得べき最上を盡し、最も適切なる順序を蹈み、今や正に其第一期の視察を終りたる者而して蒐輯する材料、視察せし結果、着々として其歸趣を一にし、其根底悉く宗教の教理と歴史と及各國の民情及社會的組織に淵源する所あるを確信を有するに至る、今にして西教事情に關して少しく言を立つるも恐くは正鵠を誤らざる可きを信ず而して殆と故國の師友通信を促すこと益々急也、乃筆を採りて西教事情を草せしとす、然れども各種の題下に概括的叙述を取りて日記的記載の繁を避けむと欲するが故に、先づ此書を裁して一は以て緒言に代へ、一は以て旅行道程を縮寫して別後消息の大體を致す所也。

米國

昨年四月十三日正午横濱を解纜し二十五日晩香坡に着し三十日早朝シカゴ市に着せり、太平洋の鯨波、落機山の積雪、壯々たる曠原等、天然の大觀を送迎し來りて頓に二十層の家屋櫛比せる街頭に立つ、其間の變化最も著し池山君と視察を肇むシカゴ市は過去數十年間商業旺盛の結果頓に人口を增殖し爲めに貧富の懸隔、智識道德の高下、人種の異同最も著しく、爲めに社會事業正さに發達し、其活氣頗る見るべきものあり、一週間滯在審かに視察す、テラー氏のシカゴコンモンス、アダム孃のハルハウス基督教青年會等其主要なるもの、同青年會は現書記長ウルバー、メッサー氏が十年一日の如く盡瘁せられし結果によりて最も完全なる本部會堂を有す、欽羨忘る能はず去りて紐育市に着す世界中倫敦に亞ぐの大市場社會事業亦勃興せり而して青年會として北米合衆國及加奈陀の中心たり、審に視察す、特に記述す可し又萬國傳道會社の如き之を訪問して皆報告を得たり

紐育を中心として南北二回の旅行をなす、南の方華盛頓府に獨立の偉業を追想し、大統領に面謁の榮を得、パルチモアーに舊教及びメソヂスト等を視察し、フヰラデルフヰヤにクエカー其他の新教を視察し、北の方ボストンにユニテリアン、

バプチスト等諸宗派の信念を審察し各地の民情と歴史とによりて其狀態を異にするものあるを知り得たり、特に同地にては南條師の紹介にて同地ハーバート大學の梵學教授ランマン氏を訪ひ又トーイ教授を訪問せり又同地に滯留せらるゝ松本文教君と同道して杉村君の紹介せる佛教信者ウエード氏を訪へり、性眞摯一見舊知の如し要するに同地はピューリタンの上陸せし處、米國中最古風にして信仰最も熾あり、宛として一個の小英國、予は特に同地に於て佛教信念の萠芽を好みつゝあるを認知するを得たり。

米國宗教制度に關しては、エバンストンの北西大學總長ローシャ博士バルチモーのジョンスホプキン大學のアダム教授等に就て指揮を得たり、前者は有名の米國法律學者にして米國憲法上の解釋を示され、後者は有名の米國歴史家にして各州に於ける宗教の位置を示されたり又嘗て日本大學教授たりしチソン氏の紹介にてニューヨーク法律圖書館に入り又嘗て岩倉右府と共に歐洲を漫遊せしパルソン氏の案內にて華盛頓圖書館に入り、米國各州宗教法人條例、及米國宗教歴史等有益なる圖書を得て彼最も茫乎たる米國宗教制度上に於て適當なる取調を得たる極めて幸とする所也。

監獄及感化院の取調に關しては日本出立已來同道を得萬事につき非常の便益を與へられたる監獄事務官小河滋次郎氏の適切なる指導と援助を得たるは最も感謝する所也、同氏と共にデトロイ、ニューヨーク、フヰラデルフヰヤ、等の監獄、グリーンウッド、ロチエスター、等の感化院、ニューヨークアシラム、ブヰラデルフヰヤのギラルド・コレーヂ等を縱覽し、米國感化事業の大勢を知る事を得たり。

已上米大陸の視察は同僚池山君と共に爲せし所、且相謀りて曰前途歐洲視察すべき國多くして日洵に少し所謂日暮て道遠き者、請ふ互に分擔して事に從はむと乃ち同君は直に獨逸に行き伯林大學に入りて學理的研究に着手し、予は先づ英國を視察し、夏、佛國に相會する事を約す乃ち同君は五月十八日を以て獨逸ブレーメンに向ひ、予は同二十三日を以て米國を辭して英國リバプールに向ふ

(未完)

* * *

先德餘香

文學士 本多高陽

◎中古の高僧碩德の氣高い芳しい行實は、物の本にも澤山出て居て、知るたよりも有るが、ツイ近世の高僧の事は却て知れ難い節がある、依て僕は自分の手扣の代りに聞き込んだ事を一見た事は猶更であるが一書き付けて、皆さんと共々に、先哲の德風を仰がうと思ふ、併し僕は、聞き込んだ事が至て少いから、皆樣が御存知の事は、成るべく、聞かして頂き度いと思ふから、ドーゾ願ひます

◎貫昭國師　先頃易簀せられた、淺草寺の前住職奥田貫昭師は、近世稀なる高德の人で有た事は誰れしも異論の無い事であるが、僕は同師に付て直接に深く感じた一事を紹介しやう、明治二十五年で有たが、大日本佛教青年會は、始めて釋尊降誕會を、神田區錦町の大學講義室に於て、盛に催す事に決し

た、其事を國師は聞き傳へて、帝國大學々生、高等中學生徒より成立て居て、而も佛教青年會中の一團體たる德風會へ向けて、國師の率ゐて居られわ顯揚會員を青年會へ加入せしめて降誕會に出席せしめ度と申込まれた、スルト德風會員中に妙な相談が起た、我々は俗士の佛教信者の團體で此降誕會を催ふといふ顏觸れである、縱令僧侶も居ても、學生の制服を着て俗士顏して居る、夫に方袍圓顱の顯揚會員が、開主の仲間で出て來たらドンナであらう、我々は固より構はぬけれど、世間で氣受がドーであらう、又坊主の仕事かと言て、一けなしにするだらう、言ひにくいけれども入會を謝絕しやうといふ事に決した、僕も此恐なる議論に大贊成で有た、して其時分僕は會の世話をして居たから、國師の許へ謝絕に行く役といふ貧乏圖を引いた、いやではあるが詮方なく國師を訪ひ、刺を通じて面接した、而も僕は初對面である、尤誰で有たか今忘れたが、今一人の同行者は有たが、是も此時が國師には初對面で有た、言ひにくうはあるが、先一通先に申した下らない理由を述べて、顯揚會員の入會を謝絕した、して顏を搔げて國師を見れば、從容として夫は御尤である、就ては入會したら、何程か出したいと思うた金員があるから、是を差上げ樣とて出された、ソコデ我々は如何にも無限の感惱に打たれた、コーいふ場合には誰れしも、謝絕せられたのを快くは思はぬが當然で、一旦出さうと思た金も出し度なくなるは人情である、まして出金の約束が有たでも何んでも無い、夫を國師は加入した際に寄附せんと思ひ居たりとて謝絕せられた際にも矢張出されたといふものは、實に凡人の所行では無いと思ふた、如何に我々が鐵面皮でも直に難有と手を出す譯には行かぬ、再三辭したけれども、立てといふ事なりし故、貰て歸た、誠に我々は面目を失た話であるが、其上猶一つ申譯の無い事が出來た、夫は降誕會の當日になると、專門學校の教友會の紹介で、目白僧園の律師達が續々開主として遣て居られた、實に我々は穴へも入り度い心地がした、而も國師は此降誕會には殆毎年出席して演說をして下さつた、ドーモ尊い人である、僕は夫から折々國師の許へ伺たが、何時も其溫容といひ、其住居といひ、感心せぬ事は無つた、實に大德で有た、又とは得難い人であるが、惜しい事をした　(未完)

小惡を輕しとして以て殃なしと爲すことなかれ、
水滴微なりと雖も漸く大器に盈つ

信　家

清澤滿之

忍耐勉强は吾人の一日も怠にすべからざることである、佛教者は之を忍辱精進と云ふ、即ち忍辱は所謂忍耐で、精進は所謂勉强である、只世間の考と佛教の說と其趣を異にする所は、世間の忍耐勉强は常に自分自身の爲にするが主となり、佛教の忍辱精進は常に自分自身を忘るゝが主となるの點である、今忍辱の方で云ふて見るに、世間一般には耻辱とか侮辱とか云ふことは、到底忍ぶべからざることである、耻辱侮辱

を受けて默して居る樣なものは人間ではないと云ふ、然るに佛教では其耻辱侮辱を忍ばざれば忍辱とは云はぬ都合である、此邊は吾人の熟考すべき所である、

世の中で共同とか公共とか云ふことが必要でなければ、吾人は各自分自身を最も大切なるものとしても差支はないが、其れなれば社會だの國家だのと云ふものはない方が善い筈である、然るに社會が出來たり國家が出來たりするのは文明進歩の結果であるとする以上は、吾人は決して共同とか公共とか云ふことを忘れてはならない、吾人は寧ろ全力を盡して共同公共の精神を發揚せねばならないことである、

今日の社會に共同公共と云ふことを擯斥するものは一人もあるべからざる筈である、然るに實際になると弱肉强食迭相呑噬と云ふ狀態を脫せないのは何故であらうか、勿論共同公共の精神の充分に發達しないからでもある樣なれども、尙其他に非常なる誤謬が吾人の間に存する樣である、其は何事であるかと云ふに、生存競爭だの優勝劣敗だのと云ふことに對する不正の見解である、此は競爭だの勝敗だのと云ふ文字が吾人を誤らしむるのである、生存競爭と云へば、吾人が生存の爲には他人と競爭し奮鬪せねばならぬと云ふ爭鬪主義を意味するものと解し、優勝劣敗と云へば、吾人が互に相食み相殘すことを意味するものと解して、吾人は益其方向に進まねばならぬものであると思ふ、此は慥に進化論を誤解したものである、若し進化論がコーこ云ふ意味の論であれば、其は慥に世界の實相を誤解したものである、世界の實相は明に變化して止まないものである、之を變化と云ふ點から見ても差支はないが、其進化は吾人の上に在りては、生存上に長短があり、適者が生存し不適者が死亡して、うの生存と死亡との連續する間に社會が進化すると云ふ次第である、進化の中心點は適者生存と云ふことにあるのである、決して競爭だの勝敗だのと云ふことにあるのではない、其故如何と云はゞ、適とは自分自身丈に就ての適ではない、換言せば、共同公共の精神に適したるものが本當の適者である、社會の進歩は常に此本當の適者の生存によりて出來たものである、更に言ひ換へて見れば、一個人が自己の私慾に適するが爲に生存するのではない、寧ろ其人物が社會の事情に適するが爲に生存するのである、而して社會の事情とは決して外のことはない、共同公共の事情である、共同公共の福祉である、共同公共の運命である、

果して吾人が共同公共の爲にせねばならぬとして見れば、吾人は吾人の欲望中に於て、他人に損害を與ふる樣なものは之を除却せねばならぬ、如何に自身に取りては苦しきことにても公共の爲には之を忍受せねばならぬ、之を忍受するのは、一寸見た所では苦痛であるなれども、其實は一種高尙なる歡樂である、其苦樂の程度は公共心の發達の程度によることである、非常に公共心の發達したる人物は、侮辱耻辱を忍受するが如き場合に於ても、其が公共の爲であるなれば、寧ろ大なる觀樂を感じて少しも痛苦を感せない、此の如き人物は公共的精神の爲に非常なる忍辱の心を獲得することである、社

會は此種の人物を最も必要とすることである、此種の人物によらずば社會は決して進歩するものではない、彼の自分自身のことのみを專一として、直に侮辱だの恥辱だのと喧しく云ふ樣な人物は社會の爲には入用ではない、入用でないのみならず寧ろ有害である、吾人は宜しく自ら大ひに此點に就きて反省すべきである、

然るに公共の利害と云ふことは、實際になると、甚だ不明了なものである、利と思ふたことが害となり、害と思ふたことが利となり、容易に正確なる計算の出來るものでない、故に此の如き論議のみでは決して本當の忍辱の心は發動しない、此點を一層に明瞭ならしむるには、彼の侮辱恥辱を忍ぶのが社會の利とならぬのみならず寧ろ社會の害となると思はるゝ場合に就きて見るがよい、自分自身には侮辱であり恥辱である、社會の爲にも有害である、夫でも尙其侮辱恥辱を忍受すべきや否や、是れ忍辱に關する最後の論點である、

吾人が通常社會の爲とか公共の爲とか云ふときは、吾人は社會公共の利害が容易に計算の出來るものと思ふて居る樣である、シカシ此は慥に誤解である、古來「禍福は糾べる繩の如し」とか「人間萬事塞翁が馬」とか云へるは此事の實驗より出たる格言と思はるゝ、然らば社會の利害だの公共の利害だのと云ふことは全く空言であるかと云ふに、然り全く空言であるが、一種深き意味を有する空言である、如何なる意味があるかと云ふに、吾人は通常個々獨立自存し得べきものであると思ふて居るが、若し吾人が個々獨立自存し得べきものであるならば、吾人には自己の利害丈で、社會公共の利害抔を思ふ必要はない筈である、然るに吾人は決してソー云ふものではない、吾人には自己の利害と公共の利害との相反對したる利害を思ふ心がある、此反對の心が調和せざる間は吾人は決して苦痛を免れない、如何せば此調和が出來るであらうか、其は彼の進化論や文明論が說き示して居る、何を說き示して居るか、吾人は社會公共の事を離るゝことを得ない、之を離るれば吾人は自滅せねばならぬと云ふことを說き示して居る、進化論や文明論は吾人に對して未來の利害を計算せよと云ふ者でない過去の事跡は此の如くでありたと云ふことを云ふて居るのみである、ソコデ吾人の學ぶべきことは何事であるか、外ではない、吾人の生存は決して獨立的の者でない、根本的に公共的の者であると云ふことを知るべきである、吾人の生存が根本的に公共的である以上は、吾人は社會公共の利害を以て自家の利害とし社會公共の責任を以て自家の責任とすべきである、然れば社會に罪惡があり不德がある場合には如何に之を處すべきや、彼の罪惡を犯し不德を行ふ者が到底自ら其責に任ずる能はざることは、恰も小兒が法律上の責任を負ふ能はざるが如くである、是に於てか親心あるもの、即ち社會的公共的精神ある者は、彼の罪惡不德に對して其責に任せずには居られないことである、佛陀の精神は此處にあるのである、一切衆生を救濟せんとの親心は決して侮辱だの恥辱だのと云ふことを思ふ餘地がない、非義不道の行動を爲すものに對して愈慈愍の念に堪へないことである此が無限的の忍辱である

動機を一轉せしめよ

（修養の一方法）

楠龍造

誰人に論なく一事を爲し一業を行はんとするに當り、必ず相衝突せる二種の思想の附隨し來ることを、內察することを得ん、吾人は眞善の方面に能ふだけ及ぶたけ進行せざるべからず、一事をなし一業を行はんとする皆な之がためのみ、これ一種の思想なり、されど其裏面に名利の思想の潛在せる者あり、これ他の一種の思想なり、眞正に心德を修養せんとする人にありて、此二種の思想は衝突をなして苦腦を與ふ、云ふ勿れ吾人の事業をなさんとするは人のため同胞のため國のため世界のため、義のため善のため大道のためなりと、焉ぞ知らん知れぬ奧深き心內の囁きは名利の聲ならんとは、されど疑ふ、名利果して惡邪なるか、名利は人心を興奮し活氣を與へ勇氣を與へ力を與へ勞動を與へ勤勉を與へ進步發達を與ふるにあらずや、若し人より名利心を全然除却し去らば枯木死灰となるにあらずや、こは常識上有力の議論なり、世間普通の見解なり、然し乍ら深く考一考せよ、名利を基礎として果して心德を修養し得るや、古來の偉聖誰れか名利に立て修養をつみたるものあるか、名利は人に勇氣勤勉を與ふるは事實なり、されど勇氣勤勉直に稱するを得ず、石川五右衞門も熊坂長範も皆な一種の勇氣勤勉を有せり、然し斯る勇氣勤勉は唯に賞すべからざるのみならず、大に排斥せざるべかざるなり、孔子も「ソクラテス」も勇氣勤勉を有せり、此の勇氣勤勉は唯に排斥すべからざるのみならず、大に賞讃敬慕せざるべからざるなり、これ義務人道より出でたる者なればなり、然るに世人は此の義務人道の根底より淸淨高潔なる、勇氣勤勉活動進步發達の流出し來るを知らず、單に名利より勇氣活動生じ來ると思ふは謬妄なり、名利より出る勇氣活動は、幾多の害毒を含有せるものなるが故之を棄てざるべからず、義務人道より出る勇氣活動は、淸淨純潔なるものなるが故之に依順せざるべからず、慈悲も力なれば暴逆も力なり、佛の力なれば惡魔も力なり、されど人誰れか力たるの故を以て眞正に惡魔暴逆を敬慕するものあらんや、唯だ敬慕すべきは慈悲の力なり、佛の力なり、

吾人一事業をなさんとするや、先つ名利の念萌生し來る、嗚呼こは動機一轉せしむべき時なり、此時自らかく思ふべし、この事業は義務のため向上の大道のためなりと、かくして義務大道に背きたる言行云爲を避くるをつとめよ、初は假飾の觀ありて頗る面白からず、また一方に發出せんとする力を他に轉回することなれば、心中に苦惱を感ずるは事實なり、されど常に此の如き習慣を養成するに至らば、一回よりは二回、二回よりは三回と、次第に其度を重ぬるに至らば、遂には名利の動機を壓絕して義務若くは人道の動機よりして行動をなすことを得るに至る、吾人は名利の萌生を恐れて活動迄を止めんとする隱遁主義には到底一致することを能はず、また名利を以て活動の基礎とする人々には一致する能はず、唯だ吾人は事業をなすにあたり、多くは名利心之に隨ふは常なるが故、

故意に意識的に動機を一轉し、義務心よりして之をなさんことの習慣をつみ、自己修養の一方法となさんことを希望するものなり、

罪障功德ノ体トナル　コホリトミツノコトクニテ
コホリオホキニミツオホシ　サハリオホキニ德オホシ

動機一轉すれば、惡に強き人また善にも強きを得ん、罪惡の凡夫、日常動機一轉に注意すれば、また至善の人たるを得んかな

本部廣告

一金壹百圓也　北陸佛敎聯合會
一金拾圓也　能美佛敎徒同盟會

右御寄附を辱うし御高志の段玆に謹て謝意を表し候也

大日本佛敎徒同盟會本部

厭離穢土の敎は世敎に害ありと云ふ者あり、予は厭離穢土の心ありてはじめて世道も進むものなりと思へり、佛敎はまことに厭世敎なり、厭世敎なるゆゑに世に益あるなり、世といへるものを分析すれば、酒色財名利等の惡德をもて充滿せり、これを愛着するゆゑに道理明かならざるなり、世を厭へば酒色財等の眞相分明にして愛着の念を離る、故に道理分明に見へて世に處して能く世を利することを得るなり、昔より世に大利益を與へし人々はみな此酒色財等の世相を厭離せし人なり、此世に執着深き人の大道を唱へたるを聞かず、故に厭世家にあらざれば眞實世に利益することなし、(七里恒順師法話)

少年園編纂　東京遊學案内

第二十六版發行
金參拾五錢
郵稅四錢

本書は明治三十三年以來毎年改正するものにして書中載する所は最新最近を期し學校塾舍の改廢を正し入學試驗問題の誤謬なきを力めたるは世已に定評あり近頃猶商ありて本書發賣高の多きを羨み全く同名の僞物を發行せり世の人購求に際して少年園編纂のものと混同し給はざらんことを請ふ

明治三十四年　就職受驗案内

第三版發兌
金貳拾五錢
郵稅四錢

本書に試驗規則問題集と名く高等文官外交官判事檢事辯護士敎員醫師神職海員より產一に婆看護婦巡査執達吏に至る官吏公職に就かんとする者のために試驗の期日場所出願及問題等を掲ぐ手續受驗者の資格試驗科目

東京市内勞働社會　就業案内

金拾五錢
郵稅貳錢

勞働の業に從はんと欲して世こ如何なる勞働の業あるかを知らざる者は本書に問ふべし諸種の勞働の業に就くべき手續を知らざる者ー本書に問ふべし賃銀の比較仕事ノ難易將來の見込等を知らざる者は本書に問ふべし總て勞働者にして就業の案内を得んと欲する者は本書に問ふべし(萬朝報)

再版　貧の朋友

宮崎右夫編纂
金拾五錢
郵稅貳錢

此書は貧と戰ひて能く成功したる東西人傑の小傳より處世の方法成功の要訣に至るまで美しき文章にて描きたるものなり(中央公論)著者は湖處子の令弟にして西國立志編以來未だ多くの見ざる青年必讀の好著也(富士新聞)

發行所　東京神田區南甲賀町八番地　內外出版協會

文學士野村浩一
文學士本多辰次郎　共著

新編東洋史要

全一冊紙數百六十餘頁
定價金六拾錢

本書は中等教育を施すべき諸學校の教科書に宛てむが爲に編纂せり

本書の特色は左の如し

第一　叙述簡明正確なり　正確なる智識を順序正しく生徒に與ふる事は中等教育に於て最必要とする所なり本書は此點に注意して全體の分量を簡にして彼雜駁なる智識を多量に強いて注入せんとする弊害を排除せんことを力めたり

第二　文章平易明瞭なり　近來中等教育を受くる學生は漸く漢文の學力を減じたれば本書は力めて文章を平易にして難解の辭句の爲に歴史智識を得るを妨げんとする弊害を除去せんと注意したり

第三　記事繁簡當を得　長き時代と廣き邦土とを包含する歴史を僅少の時間内に教授せんとする爲古代に精しくして却て比較的必要大なる近世史を粗にする東洋史教授の通患なり本書は此弊に鑑み古代を簡單にして近世に至るに從て比較的評說したり

右は著者が年來の教授の經檢に徴して感する所なり是れ本書を編纂して世に問ふ所以なり

發賣所　大阪市東區安土町四丁目　積善館

明治三十一年十二月二十六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十四年三月一日發行○毎月二回(一日、十五日)發行

信仰の餘瀝

全一冊寸珍美本紙數百頁餘

文學士　清澤滿之師序
文學士　近角常觀君著

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵税不要●郵券代用一割增

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其說く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の理、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして戛然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんことをすゝむ、

一、宗教的同朋。　二、活ける懺悔。
三、外、柔にして、内、剛なるべし。
四、聲をきくべし、光を見るべし。
五、我を捨てむと欲すれば捨つる能はず。
六、佛の人格。
七、地を固く踏めざれど常に歩を進めよ。
八、信界に於ける監獄。
九、詩的信仰は一種の懈慢界なり。
一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
一一、因果應報は宗教的自覺なり。
一二、相對世界の眞相。
一三、生きんが爲めに働くべからず、働かんが爲に生くべし。
一四、佛陀を近きに求めよ。
一五、信念の修養は實際問題に如くなし。

發行所　東京本郷森川町一番地　大日本佛教徒同盟會出版部